

社会科における「思考・判断・表現」の評価

峯 明秀

大阪教育大学 准教授

1 社会科は何を評価するのか

社会科ほど、学習者に期待する能力や資質形成が異なる教科は珍しい。学校現場では多様な実践が行われ、それを評価しようにも、何を基準に良し悪しを評価すればよいのか曖昧なものになっている。しかし、どのような教科観、授業観に立とうとも、社会科の目標の最大公約数は、学習者の「社会の見方・考え方」を育てることにある。つまり、社会科における思考・判断、それを通じた表現の評価のあり方、評価の規準（基準）が求められる。

以下、学校現場において評価規準の設定や学習評価を進める際に参考にされる国立教育政策研究所教育課程研究センター「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料（中学校 社会）」（平成23年7月、以下、「参考資料」と記す）をもとに、何をどのように生かせばよいかについて提案する⁽¹⁾。

2 「参考資料」評価規準設定の構成

「評価の観点及びその趣旨」は、学習指導要領を踏まえ、社会科の特性に応じて次のように示されている。教科の観点から各分野へ、そして、歴史的分野の大項目、地理及び公民的分野の中項目を内容のまとまりとして、各観点の表現の基本形を踏襲し、評価規準に盛り込む事項及び評価規準が設定されている⁽²⁾。

評価に関する事例（第3編）のうち、公民的分野の学習指導要領（1）イに対応する事例として、単元名「現代社会をとらえる見方や考え方」を取り上げる。4観点のうち、思考・判断・表現の設定例は、以下に示される（「参考資料」88頁）。

- ① 決定の仕方、決定したことを「きまり」として守ることにどのような意味があるのかについて多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現している。

表1 評価の観点及びその趣旨

社会的事象への関心・意欲・態度	社会的な思考・判断・表現	資料活用の技能	知識・理解
社会的事象に対する関心を高め、それを意欲的に追究し、よりよい社会を考え自覚をもって責任を果たそうとする。	社会的事象から課題を見だし、社会的事象の意義や特色、相互の関連を <u>多面的・多角的に考察し、社会の変化を踏まえ公正に判断して、その過程や結果を適切に表現している。</u>	社会的事象に関する諸資料から有用な情報を適切に選択して、効果的に活用している。	社会的事象の意義や特色、相互の関連を理解し、その <u>知識を身に付けている。</u>

- ② 社会集団を形成し、その一員として所属する集団や所属員に関わる問題を解決する際、どのような決定が望ましいのかについて現代社会をとらえる見方や考え方の基礎としての対立と合意、効率と構成などの視点から多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現している。 (下線…筆者)

本単元は「考察」が中心であるため、判断は含まれていない。ここでは、考察の過程や結果が適切に表現されているかどうかを評価することが示される。多面的・多角的な考察のための手がかりとして、「知識・理解」の評価規準は以下の通りである。(①は省略)

- ② 社会生活において、「対立」が生じた場合、多様な考え方を持つ人が社会集団の中で共に成り立ち、互いの利益が得られるよう、何らかの決定を行い、「合意」に至る努力がなされていることを理解し、その知識を身につけている。
- ③ 合意の妥当性を判断する際に、無駄を省く「効率」と決定の手続きや内容についての「公正」が必要であることを理解し、その知識を身に付けている。

②・③では「知識・理解」に示される理解内容が、知識として身に付けられていることを前提にした「思考・判断・表現」の記述内容の評価が求められている。本単元では、「対立」「合意」「効率」「公正」の概念を理解し、それらを知識として身につけた上で、問題解決がなされているかどうかを見ることになる。そこで、指導と評価の計画(8時間)の展開例を検討する。第三次(2時間扱い)は、回転寿司店や体育館の使用日数の公正な配分

の事例を考えることを通して、「効率」「公正」の概念を理解する展開が示される。第四次では、学習者にとって身近な学校の清掃活動における「きまり」を話し合う中で、習得された知識を活用して、合意に至った結論を導くというものになっている。評価は、使用するワークシートの回答欄に記入された内容に「効率」「公正」を踏まえた問題解決ができているかどうかを見ることになる。

3 事例における評価の実際

では、指導の流れに沿って評価してみよう。事例では、問題設定として学校生活の日程と清掃活動が取り上げられる(図1)。現状のA案(15分間、場所の学期1回の交代)に対し、改善のB案(清掃が終了次第、昼休み)が出される。清掃場所・人数・必要な時間が条件として示され、学級における清掃のやり方について合意形成を図るというものである。ワークシートには、次のア～ウの問いへの記入を求めている。(記号…筆者)

- ア どんな「対立」が見られましたか。また、なぜ「対立」したのでしょうか。
- イ どのようにしてあなたの学級は「合意」に至りましたか
- ウ 身の回りにある「きまり」で、清掃活動の場合と同じように効率と公正についてよく考える事例を記入しましょう
- 評価者は、ア～ウの回答を見ることになる。アでは、人数の均等割は場所によって清掃に必要な時間が異なることが指摘される。そして、どのように人数を変えるのか、交代の頻度、清掃に対する意欲などが問題にされる。また、全員が時間を揃えることによって、昼休みの時間が削減されることが問題になる。

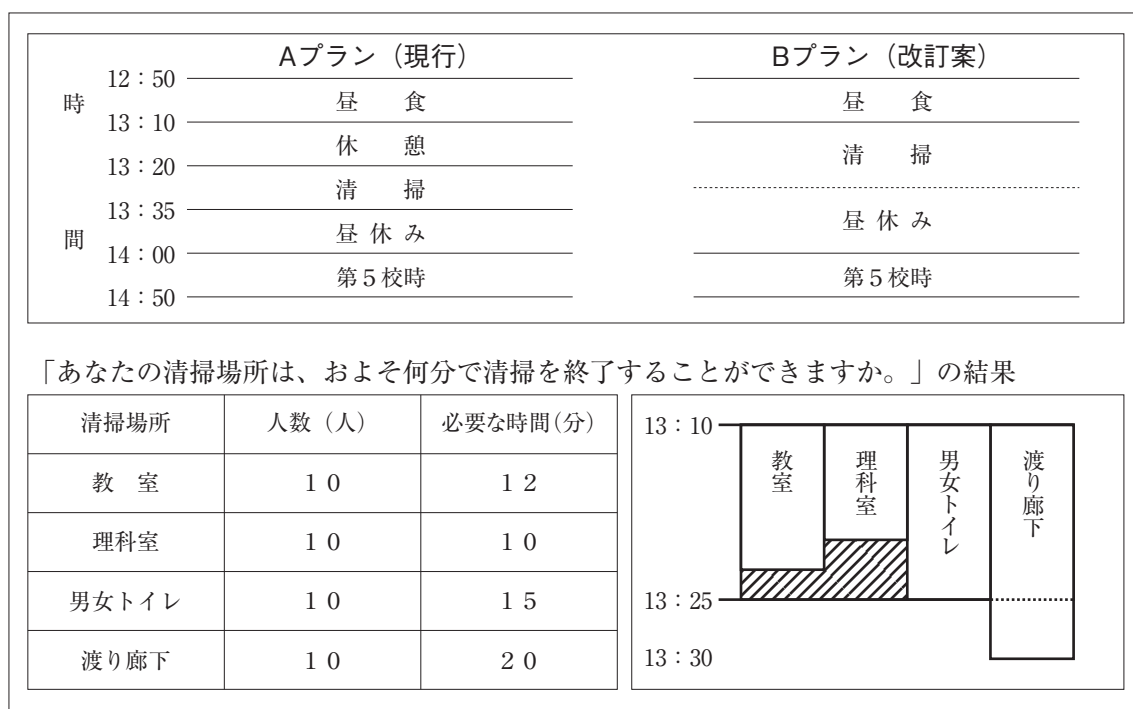


図1 「効率と公正の考え方から清掃のきまりを吟味しよう」ワークシートの一部

イでは、「合意」のために無駄を省く「効率」と決定の手続きや内容についての「公正」さが書かれているかどうかを見る。ウでは、清掃と同じような事例として、公共の空き地利用や限られた財政の分配などの例が書いているかどうかを見ることになる。「努力を要する」状況（C）は、まったく書けていなかったり効率や公正の視点がなかったりするものが考えられる。「十分満足できる」状況（A）は、具体的な事例を示し、その解決について論理的に記述したものが考えられよう。

以上、参考資料に示された評価規準及び評価方法についての構成と本事例から、第一に「思考・判断・表現」のためには「知識・理解」が必要とされること、そして各々の観点は切り離されているのではなく、入れ子構造となっていること、第二に理解内容としての

知識のレベルは「公正」「効率」などの概念であること、第三に評価規準の設定から事例までが論理整合的に具体化が図れるようになっていることが抽出できる。しかし、同時に次の課題が指摘できよう。

4 評価規準の課題

(1) 理論説明、概念枠組みの必要性

大項目（1）イでは、「公正」「効率」の理解が鍵となる。『中学校学習指導要領解説 社会編』123頁には、以下が示されている。

「効率」については、社会全体で「無駄を省く」という考え方である。すなわち、「合意」された内容は無駄を省く最善のものになっているかを検討することを意味しているのである。一方、「公正」については「みんなが参加して決めているか、

だれか参加できていない人はいないか」
 というような手続きの公正さや「不当に
 不利益を被っている人をなくす」「みんな
 が同じになるようにする」といった機
 会の公正さや結果の公正さなど、「公正」
 には様々な意味合いがあることを理解さ
 せた上で、「合意」の手続きについての公
 正さや「合意」の内容の公正さについて
 検討する…。

ここでは、合意に至るため無駄を省く「効
 率」と「公正」における手続きの公正さ、機
 会の公正さ、結果の公正さ、内容の公正さが
 示される。これら概念によって、現代社会の
 諸事象を捉え、政治や経済、国際社会の諸事
 象を理解する学習につなげることがねらわれ
 ている。このことは内容構成の大項目（1）
 の「現代社会はどう見えるのか」「どう見る

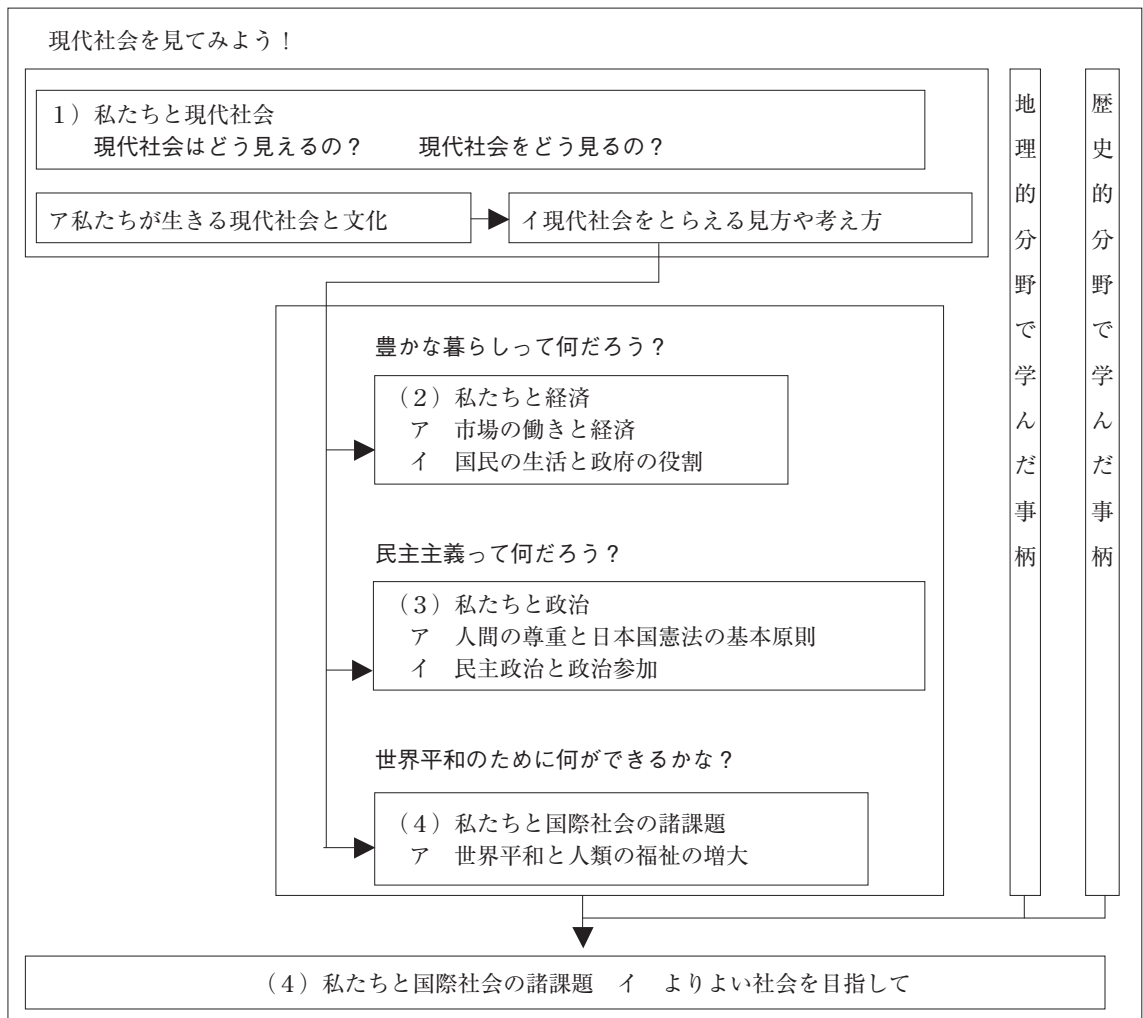


図2 中学校公民的学習の流れ

文部科学省『中学校学習指導要領解説 社会編』日本文教出版、2008、p.117

表2 中学校公民的分野の学習のための理論と知識

学習指導要領内容	理論や概念例	扱われる知識
(1) 私たちと現代社会 ア 私たちが生きる現代社会と文化 イ 現代社会をとらえる見方や考え方	メディア 社会システム 社会的公正	グローバル化、少子高齢社会、経済のサービス化、情報化、共生、多文化
(2) 私たちと経済 ア 市場の働きと経済 イ 国民の生活と政府の役割	資源の再配分 パレート最適、合理的期待 デモクラシシー リバタリアニズム、コミュニティリアニズム	市場、金融、需要・供給、価格、生産、消費、契約消費者保護 財政、社会保障、税 社会資本
(3) 私たちと政治 ア 人間の尊重と日本国憲法の基本的原則 イ 民主政治と政治参加	自然権、 国家論 多元的国家論 ナショナリズム 社会選択理論	基本的人権、権利、義務、労働、政治、権力、主権、法、民主主義、平和主義、憲法、象徴、地方自治、住民参加
(4) 私たちと国際社会の諸課題 ア 世界平和と人類の福祉の増大 イ よりよい社会を目指して（新設）	文明の衝突	主権国家、領土・領海・領空、貿易資源エネルギー、環境保全 持続可能性

(筆者作成)

のか」で社会の見方・考え方を学習し、それをもとにした(2)~(4)アに反映させる。また、各内容には「豊かな暮らしって何だろう」「民主主義って何だろう」「世界平和のために何ができるのかな」などの価値に迫る問いが設定されている(図2)。

しかし、現実の社会で生起する問題や対立は複雑に絡み合い、価値や信念と密接に関連している。だれにとっても幸福や自由か、美德に照らしてどうかなど合意形成に至るためには、「効率」「公正」によってのみ問題解決が図られないことを意味する。そして、問題自体を深く掘り下げて捉えるための理論の説明、概念枠組みが必要になる。例えば、様々な分野が関係し検討を要する社会保障や地球環境の問題では、どのような価値の指向性をもった公正なのか、公正を裏付ける理論は何かが明らかになっていることが必要である。この観点からすれば、公正や効率を考えるための手がかりとなる理論、社会の諸事象をどのように捉え説明するのが評価の鍵となる。

例えば、表2の波線囲いで示すように、どのような理論や概念を用いて、どのような知識を扱おうとしているのを示すことである。

(2) 思考技能の段階性

理論や概念枠組みは、単に記憶によって知識として獲得されている状況と、それが使用できる状況とを区別することが求められる。例えば、「…公正に配分されなければならない」と書かれた文章は、「公正」の文字の有無が問題なのではない。何の、どのような状況が公正さを担保しているのか、どのように配分することが公正なのかを説明できているかが重要である。その際、評価のポイントは説明力の大きさ、正しさの吟味である。社会事象をどのように分析し、その原因や結果、理由や背景、他への影響などが書けているか、また論述の整合性や具体性などを見ることが必要であろう。その際、何がどの程度、書けるかについては演繹的に段階を設定するよりも、作品のサンプルを集め、典型例を抽出することが現実に使える評価規準(基準)

になるのではなからうか。

5 評価規準の漸次的な改善

公的な「参考資料」の学校現場への影響力は大きい。資料に示される評価規準をモデルにして、地区や学校ごとに単元の評価規準が作成されることが予想される。学力を要素に分解し還元する観点別評価はどのように再構成され、総合されるのか。「知識・理解」と切り離された「思考・判断・表現」がないことを前提にするならば、内容のまとまりや単元において、どのような知識内容をもとに、考察したり判断したりするのが明らかにされる必要がある。用語や地名、人物名、年号、固有名詞などの事実的知識、概念や理論などの説明的知識と思考技能との関係を示していく必要があろう。今回、焦点をあてた公民以外の地理・歴史の各分野に共通して、学習者の認識の発達に応じて、質やレベルの異なる知識を学習者はどのように活用し、原因や結果、影響や理由などを説明するのか、各単元や事例に応じた評価規準（基準）の具体が示される必要がある。例えば、2007年に示され

た英国ナショナル・カリキュラムのキーステージ3における歴史学習では、学習者が深く広く歴史を理解するための鍵概念を次のように示している³。ここでは6項目からなる理解の観点が示される。また、歴史の鍵となる本質的なスキルやプロセスとして、歴史的探究や証拠の使用、情報を想起、選択、分類、組織化し、適切に記述し表現する過去との対話が示される。今後、日本においても観点別評価の学力要素の中身と思考技能の検討を通して、評価規準の漸次的な改善が図られていくことを期待する。

<注>

- (1) 小学校社会の「思考・判断・表現」の評価規準は別稿において分析した。拙稿「参考資料の生かし方－小学校社会科－」『指導と評価』No681、日本図書文化協会、2011、pp12-15。
- (2) 各観点の文末表現はブレイクダウンされる。「参考資料」第2編 第2、21頁。
- (3) History Programme of study for key stage 3 and attainment target (The National Curriculum 2007) (www.int-soc-hist-didact.org/curricula/UK-Key Stage.3.pdf 2011.12.26)

表3 2007年版英国ナショナル・カリキュラムK-3 歴史の理解のための鍵概念

1.1 年代学的な理解	a. 歴史的な時代と時間の推移を記述するために、年号や用語、慣用語を理解し、適切に使用する。 b. 社会と時代の特性の関係を分析し分析することによって時代感覚を深める。 c. 時代順の枠組みを構築し、歴史的な文脈の中に新しい知識を置くためにこれを使用する。
1.2 文化的、民族的、宗教的多様性	a. 過去の社会において男性や女性、子どもの経験や考え、信念や態度、また、これらがどのように世界を形づくったかを理解する。
1.3 変化と連続性	a. 歴史の時代内や横断する変化と連続性を同定し説明する。
1.4 原因と結果	a. 歴史的な出来事、状況や変化の理由や結果を分析し説明する。
1.5 重要性	a. 歴史上の文脈において、現代において、出来事、人々、発展の重要性を考える。
1.6 解釈	a. 歴史家や他者がどのように解釈を形成するか理解する。 b. 一連のメディアを通して、なぜ異なる方法で歴史家や他者が、出来事、人々および状況を解釈したか理解する。 c. それらの有効性を査定するために過去の一連の解釈を評価する。

(History Programme of study for key stage 3 and attainment target N C pp.112-113 筆者訳出)